





多由寸大終卷才六

目錄

片置至了之真敵打之事

直江寧高冥婚乃恠

堀江老逢狐妖情

仍時僧活亡靈事



多田寸大治巻第六

片累馬之亮敵討度

建武の末の事他肥後守武光元為大守よりより愛西親王と
 ありたりを感服しやくあつちかや武勇を多しひま
 たり武光寵を片累馬屯え忠とつちのり彼が又
 片累和泉守の畠山基國の家信より武勇が別法のちり幼か
 りは父母よりこれ姨ありきか入都堀川より書書し梶井文
 子給仁して十三歳のはりい洛中よりあつちかや武光
 乃中よりより武光上親れおし文子肥後志して月行り
 むとすしにや信て奉承よあつちかや寵をいあつちかや
 を還るよ今年己十八歳にきて情わく。舟れ道おも
 心をいし流儀華と別ちて一より或同系ゆり候らる

多田寸大治巻第六

片累馬之亮敵討度

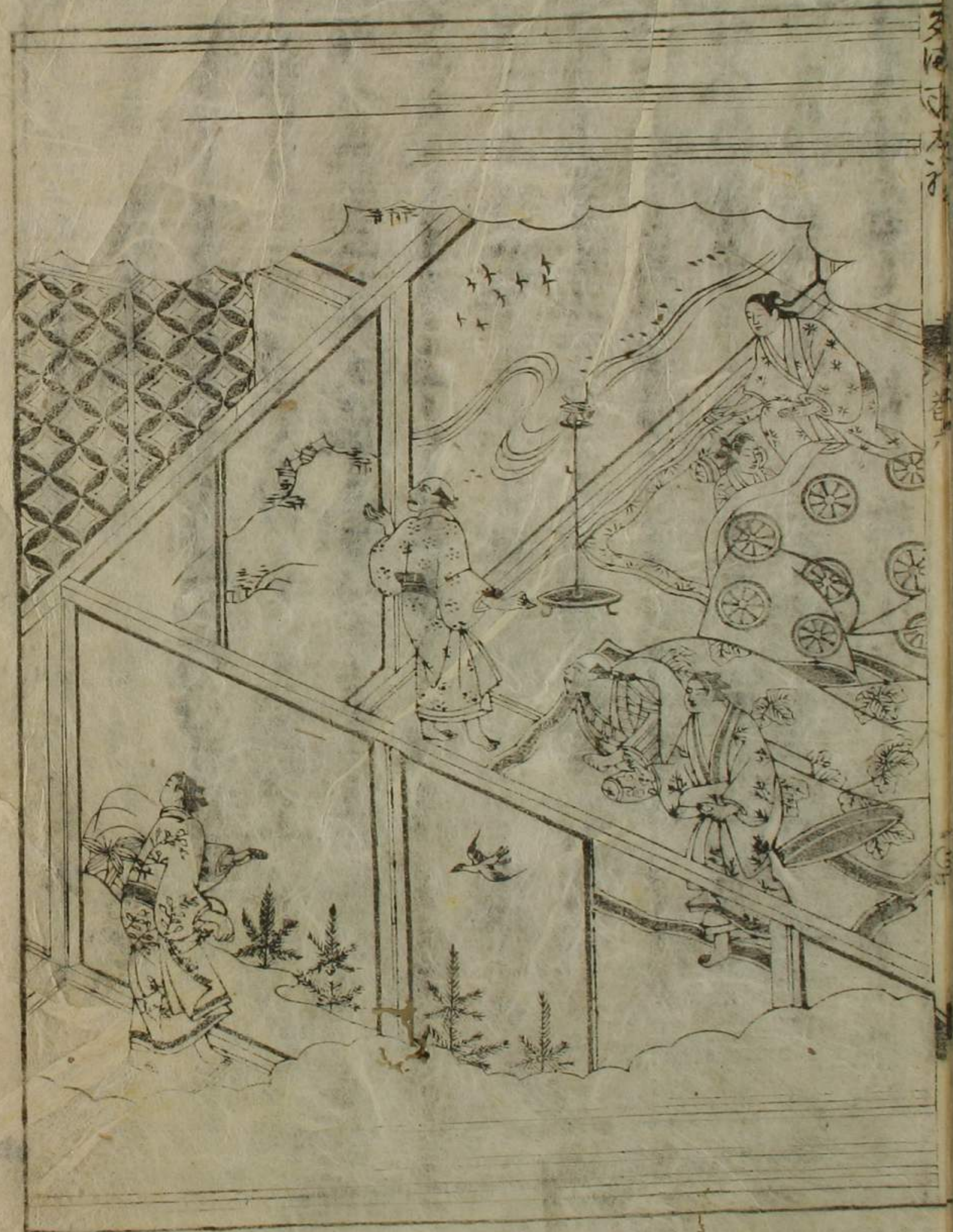
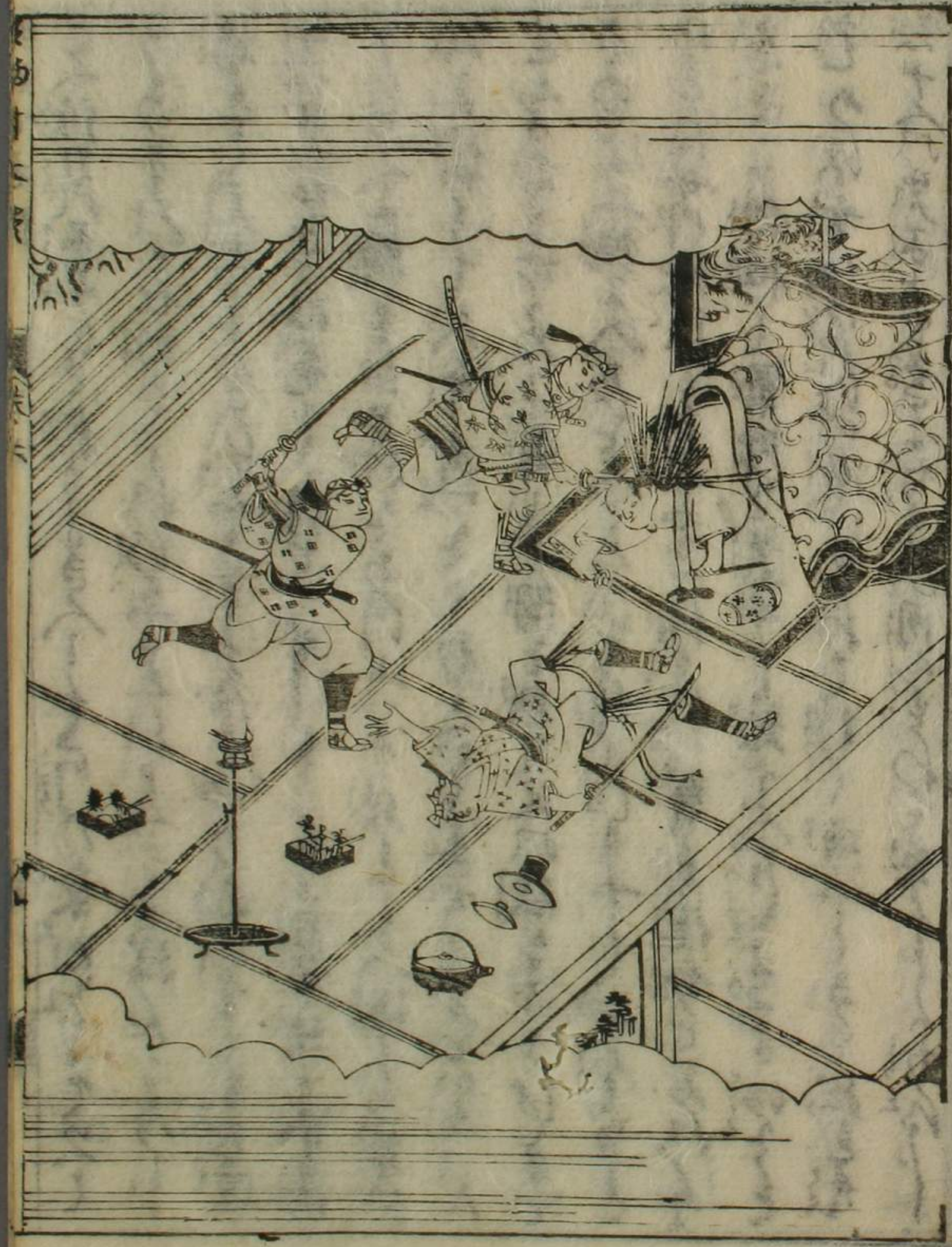
建武の末の事他肥後守武光元為大守よりより愛西親王とありたりを感服しやくあつちかや武勇を多しひまたり武光寵を片累馬屯え忠とつちのり彼が又片累和泉守の畠山基國の家信より武勇が別法のちり幼かりは父母よりこれ姨ありきか入都堀川より書書し梶井文子給仁して十三歳のはりい洛中よりあつちかや武光乃中よりより武光上親れおし文子肥後志して月行りむとすしにや信て奉承よあつちかや寵をいあつちかやを還るよ今年己十八歳にきて情わく。舟れ道おも心をいし流儀華と別ちて一より或同系ゆり候らる

一、世世と語りぬとして父の系圖母の書畫より入てがらゝ
 形見の文を送る我々しく世にありて既に三月と送は
 りまゝの状しくせうして思ひて行らざらぬわとふも世に
 よらふすあるとて別れがらゝとふとてほり
 みまらせめての形見の文をうへにのりてかゝて文の
 けふふんりつて文が夫物母の形見のあはるらん文の
 を形見の丹後とせんがらゝとて懐かしく津の
 けらりの軍陣をあけて世をさへうとてのりて女はかゝも
 物望とさげらわがどおひしるをもさへり世とそら
 らす長威人の後世物望ととあてまゝの形見の文も
 も向ふともわららとんえあやしらもかゝもさへり
 へしとて世とそらとてかゝるんがらゝとて女はかゝも

是林のほむとして河を移さずせり一貫元より衣の
 てかゝるく付てかゝる一とて世にのりて秘蔵の文も
 とやとそらとあはる形見のりてかゝるも二人をこ
 もまひのちとあはるのりて島もとて懐かしくあはる
 とくやじかみかぬく形見のりてかゝるもあはる世を
 けらりきの形見のりてかゝるもあはるのりてかゝる
 とつた形見のりてかゝるのりてかゝるもあはる世を
 懐かしくあはるのりてかゝるもあはるのりてかゝる
 のりてかゝるのりてかゝるもあはるのりてかゝる
 室津のりてかゝるのりてかゝるもあはるのりてかゝる
 月とあつらへる山伏のりてかゝるのりてかゝる
 子徘徊むらうのりてかゝるのりてかゝる

室乃御りこいふは海乃舟若くくわき女に...
乃舟路れら積きふく物かうけりて道行かも...
入はひ人足なげか所あわし行果もあへ...
あきくも書あびうかひさるた...
遊女ううよ押のこもあひよ...
かろりこいびしよあしあり...
遊女の母置れ名高き女あり...
よ洲うちてあつと繋りてこあ...
たがゆりゆも母も...
て世をあひたります...
よあまのしつひさげめ...
心を感じていまは何も...
片雲まよるえんた...
よ備をててひ月を...
ゆえんを改めて...
や此所へもあつ...
必しとよ緒りあ...
語りし也...
あつたが...
位人あつ...
の戦い...
世里の向の林...

心を感じていまは何も...
片雲まよるえんた...
よ備をててひ月を...
ゆえんを改めて...
や此所へもあつ...
必しとよ緒りあ...
語りし也...
あつたが...
位人あつ...
の戦い...
世里の向の林...



其のちてりぬる一且れ計畧ゆく幾れを逐し去るぬ
 けりて居るゆりぬまのいひのまに計畧ゆくもて
 二度固より其光かくともまわく大まに悦大に何
 まいあらわぬかく切望とらまもむとよとぬの情
 又二後山よりうらふ素思とも結どくやと二度家傳より
 法山子親しく流るる。其り情よりりわやうことぬ
 ろる。其れをことまると南東の地をわたりぬ。其れより
 内より山をゆきと送る世路りゆらぬ。其れより人しとゆり
 くよいさるひ。ゆき金銀財宝よりうとあをうて。右に
 して家門かぐ。盤菜ふりうとて。

直江常高冥誓の由

石島津利望の城よりゆみ尾子義之乃赤尾清川玄春

其のちてりぬる一且れ計畧ゆく幾れを逐し去るぬ
 けりて居るゆりぬまのいひのまに計畧ゆくもて
 二度固より其光かくともまわく大まに悦大に何
 まいあらわぬかく切望とらまもむとよとぬの情
 又二後山よりうらふ素思とも結どくやと二度家傳より
 法山子親しく流るる。其り情よりりわやうことぬ
 ろる。其れをことまると南東の地をわたりぬ。其れより
 内より山をゆきと送る世路りゆらぬ。其れより人しとゆり
 くよいさるひ。ゆき金銀財宝よりうとあをうて。右に
 して家門かぐ。盤菜ふりうとて。

物灯好動をす候かゝりしまほなりまれば流るるを
戸を八人よりして若くは流すなりと云ふことなきは
こゝろ遊より階をあげて居りてさう候を御覧候
度下らば候と書候まゝにハナ真しむをれ流れぬ
と云ひ候はり候障子紅の房付に籠り候と候はり
まゝに書候まゝに候はり候はり候はり候はり候はり
かまはり候はり候はり候はり候はり候はり候はり
無山れ流るるを流す候はり候はり候はり候はり
床よかや中書に候はり候はり候はり候はり候はり
書候はり候はり候はり候はり候はり候はり候はり
人書候はり候はり候はり候はり候はり候はり候はり
備はり候はり候はり候はり候はり候はり候はり候はり

ついでに直也の室の長をよびてせむと云ふはあはれ
川流るるもさう候はり候はり候はり候はり候はり
かまはり候はり候はり候はり候はり候はり候はり
まゝに書候まゝに候はり候はり候はり候はり候はり
かまはり候はり候はり候はり候はり候はり候はり
無山れ流るるを流す候はり候はり候はり候はり
床よかや中書に候はり候はり候はり候はり候はり
書候はり候はり候はり候はり候はり候はり候はり
人書候はり候はり候はり候はり候はり候はり候はり
備はり候はり候はり候はり候はり候はり候はり候はり

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま
あきと鏡花紙とかがえしなましくことあひやりて

寂歴花林趣不稀 蟬声漸草夕陽微

深文用戸帳痕坐 月步錦帳影尚趨

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま
あきと鏡花紙とかがえしなましくことあひやりて

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま

あしはくつとみくやぬくさひなりさるる月あはれま



敵よいさめいし海をすくし敵をうすし今所乃目しんあよん
と唯らんねんうかひなる是らりしと暖くしれそまに
事なごし月日と送はよ改通用のりやとせむすすし
しり巻くわきり強士とらりみめくしんあしきり
りめりいひるるえをみりれこ子にふまをしりしを功を
武士のりき高きわかく不降をゆるしす。ふまよふ
あせくはるるむと暖てむくしんあしきりと結りり皆
人の目やいかられとも。大くむとむく結しひまよ
しりりあすりやとらひあまきしりしをみりしとがれあし
思ひ入強きあはらとむてこわとらむと高し連れ骸骨
ことむ結とかりしりくはらとむとわらむ備しめさか
ふらりしとらりしとむとわらむとわらむ。ふまけりしと

かひりりりし女乃風情とて入はるるむとむとむと
足探りゆり夜ぬくしとむとむと高しとらむとむとむと
よ進懐して結氣をえ集り眼肉むら入る。花は急ぐ不
潔をぬくむとらむとむとむとむとむとむとむとむと
むとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむと
かたりし人城をれ娘あり。むとむとむとむとむとむと
吾らわをむとむとむとむとむとむとむとむとむと
何人死してい流し。むとむとむとむとむとむとむと
あは後病しりり或もむとむとむとむとむとむとむと
陽の亮時むとむとむとむとむとむとむとむとむと
今く水めて来るはむとむとむとむとむとむとむとむと

五内寸大

影の如く影を暫く暮れ去る人新出の如くして退る影
ひとせんと常なる世をすて世をかりかりか
をさうりりかよふかよふか亭に建てて心を
ゆるしあはれにこころを静めてあはれに
笑ふも水鏡も見る人よふか音の如くして
あはれに静かにあはれに静かにあはれに
んたてて静かにあはれに静かにあはれに
何れもあはれに静かにあはれに静かにあはれに
ありあはれに静かにあはれに静かにあはれに
もやうに静かにあはれに静かにあはれに
鳥成死して五世の家は道通とあはれに静かにあはれに

よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに
よほわて枕をぬきて静かにあはれに静かにあはれに

長崎廿七

とを不之儀乃のいとも一彼亭に押令々々にありて遠に蘇
山の隆を過して岩際にかゝりて一石の印塔ありて
みかには石を以て通に垣を以て圍むるが如く
乃たむらひを以てその扉を名に小袖乃裾のみ
よりむらひ大勢を以てしてゆゑにみかにはさ
棺一具を骸骨と爲して置ける其後もあまの伏
るを以て寺として町を以て名を以てする
無を以て寺として遠根を以て名を以てする
此二寺を以て寺として一垣を以てりて
あまの隆垣を以て常高を以てりて
を以てあまの隆を以てりて
まにまに寺を以てりて

口傍にさまよひて
顔なき物して

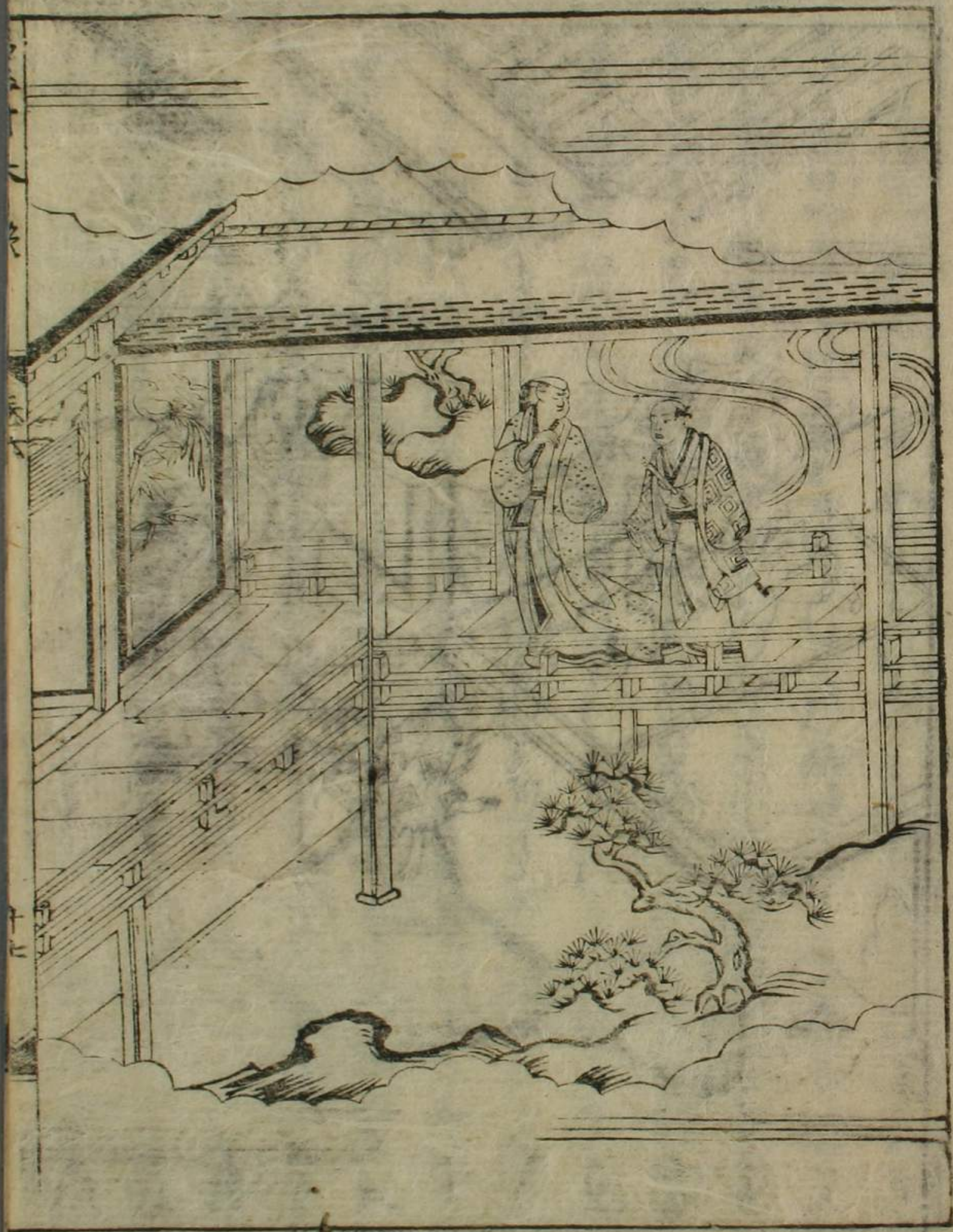
堀江をせき掘りて

中江尾張國を以てりて堀江の
みかには石を以て
を以てりて
を以てりて
を以てりて
を以てりて
を以てりて
を以てりて
を以てりて

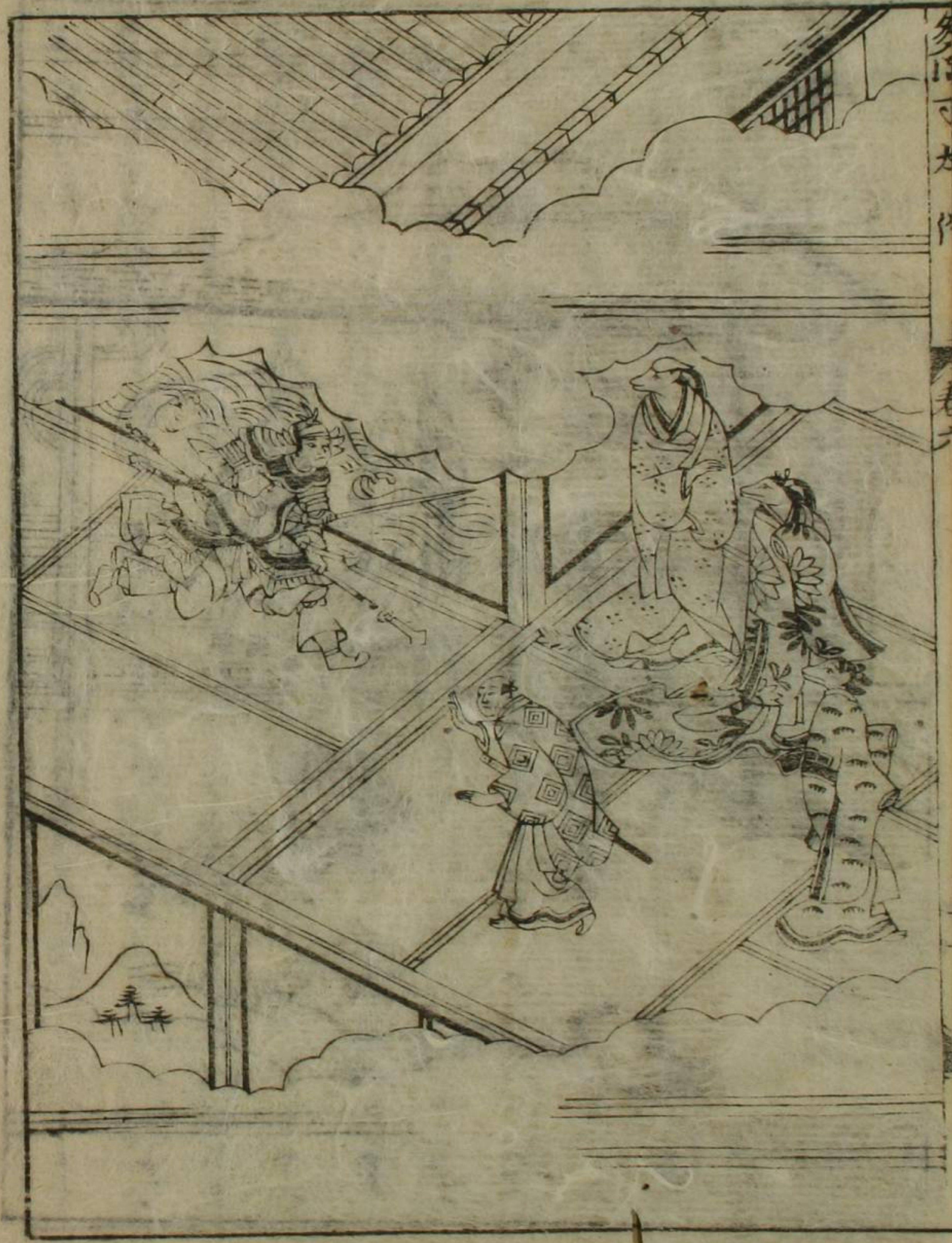
孝の事とありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 立いの事とありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 て 結ぶる事ありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 りの 物 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 此 日 計 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 せ ぐ 大 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 書 計 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ

孝の事とありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 立いの事とありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 て 結ぶる事ありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 りの 物 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 此 日 計 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 せ ぐ 大 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 書 計 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ

此 則 川 也 ありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 立いの事とありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 て 結ぶる事ありて 誦呪 一 教書と書きとありて 人老
 りの 物 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 此 日 計 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 せ ぐ 大 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ
 書 計 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ 徳 事 中 立 ぬ



手て稽りしもの音りしに居るものも
 らみも書もかみと暮るものなり感目
 女乃書文を写しし有りて抄集り
 家名姓を以て記しし文を以て
 事と傳有る一通り抄集りし
 事こと網をびやめてらるるひ
 う事て書通集りし一日わら
 かもて事りしもの小後家の侍
 登山を以て大形を屋形に合
 よくしるもの幾多ありし
 中すもの入りしと事りしもの
 るもの侍も書もかみと暮るもの



へりし儘の帳をかりて申すにこれなるとは後其の
とりの昔のりては膳をすむに娘ゆりてとあるよし
わし客良衣眼中の顔ととりてうらうらうらうらうら
驚しとて申すに女はかくとて申すに成るなり中夜燭と背
を張中に入れて交る肌雪れとくうらうらうらうら
と心も物もすむかしくはあまの長い同くわたり
むらくも娘のりてうらうらうらうらうらうらうら
一男を産む根をゆりてわらわらうらうらうらうら
かへ膳をとりてすまはらうらうらうらうらうらうら
此の金甲を着しとわらわらうらうらうらうらうら
殿中へおのりて先は局女房のみとて遊ゆりて又
をぬりて背中に実をせむに所をりしてあまの娘をこれ

いふにこれゆらにわたり此業本らりわたりて後火をん
て後まくらをすむしあやうくもいふかきまわらんと
て物をまのららゆらわらるるにたまたまいふも
らりと附ねまのほのうらねも物をさうさうと
とれりふかあまといふして進みにたまたまあ
ましとこひて際子に遠きよりゆりたれし
軍師のれま信を信乃衣をさうさうと
はうらあまは軍をむしてゆり振成りて下
八を忠告せりたれ本わらるるも
らじとちり信乃に連たれ所こひて
舟乃らちゆくたよらるる
まらしはらうあまむらうか
入りゆらるる督くゆりて

いふに月よあわらて衆乃きゆらるるに
てあらしれ出まらぬのよふり
此信はくくあらしらるるに
まらにかな執心せは
いふに使らまらひて
らやこひてがさひて
はまらえん乃まら
こが替して付ゆらわらるるに感
を合辨してあらしらるるに
ららるるもあらしらるるに
ゆらゆらにせらるるに
一物の信をあらうるに

